

第 26 回(2009.11. 6 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「干支」

昔の暦は干支(えと)で年や日を表した。干支は、十二支と十干を合わせて方向、時刻、暦などを表す古い時代の言葉である。昔は十干だけを「えと(干支)」といったようだが、最近は十二支だけを「えと」と呼ぶ場合がある。十二支といえば動物を連想するが、この十二支は古代中国の殷の時代(紀元前 17 世紀頃～前 11 世紀頃)から、12 カ月の順序を示すための数詞であったと考えられている。

還暦の持つ意味(干支)

本来、十二支の文字は、子(し)、丑(ちゅう)、寅(いん)、卯(ぼう)、辰(しん)、巳(し)、午(ご)、未(び)、申(しん)、酉(ゆう)、戌(じゅつ)、亥(がい)と読むが、これらは、古代中国の植物の成長の過程を示す言葉で、たとえば子(し)は「生む」ことであり芽生えることをいう。また、最後の亥(がい)は「核」のことで、草木が枯れて実が成り、種ができて新しい生命が宿ることをいうと考えられている。仏教が伝来される段階で、その文字から動物を当てはめたものと思われる。

また、十干は甲(こう)、乙(おつ)、丙(へい)、丁(てい)、戊(ぼ)、己(き)、庚(こう)、辛(しん)、壬(じん)、癸(き)をいうが、これも、元は十二支同様に中国の殷の時代から日の順序を示すための数詞であったと思われる。1 ヶ月(30 日)を三つに分けて、その一つ一つは 10 日間だから、それに十干を当てはめた。それぞれの意味は十二支と同じ発想で、草木の成長過程を 10 段階に分けて呼んだ。たとえば、甲は「鎧・兜」から種が発芽するに当たってまだ厚い皮を被っている状態を指すし、癸は「はかる」が語源だから、種の中身がだんだん形成されていく過程を意味している。

折りにふれて紹介してきたが、自然や人間社会など万物の生成・消滅などの現象は、すべて「五つの気」が循環することによって変化するという考えが「五行説」で、五つの気とは、木、火、土、金、水をいう。これが循環し、お互いに作用し合うのだが、それぞれに相性の良悪があり、あるいはお互いに相乗効果を生み出すなどするのだという。行というのは巡るという意味があり、この五行と陰陽と組み合わせると「陰陽五行説」というが、十干は、五つの気に二つずつ分けて、「木」は甲と乙、「火」は丙と丁、「土」は戊と己、「金」は庚と辛、「水」は壬と癸とした。それぞれ「陽」と「陰」があるから兄(え)と弟(と)に分類して、陽を兄(え)、陰を弟(と)とした。したがって、木は甲(きのえ、木の兄の意味)、乙(きのと、木の弟の意味)で、以下同じように火は丙(ひのえ)、丁(ひのと)、土は戊(つちのえ)、己(つちのと)、金は庚(かのえ)、辛(かのと)、水は壬(みずのえ)、癸(みずのと)である。すなわち、「十干」の甲乙丙丁戊己庚辛壬癸と「十二支」の子丑寅辰巳午未申酉戌亥を組み合わせると年や日を表していた。甲子、乙牛、丙寅、丁卯、戊辰、己巳、庚午、辛未、壬申、癸酉、甲戌、乙亥、丙子、丁丑、戊寅、己卯、庚辰、辛巳、壬午、癸未、甲申、乙酉、丙戌、丁亥、戊子、己丑、庚寅、辛卯、壬辰、癸巳、甲午、乙未、丙申、丁酉、戊戌、己亥、庚子、辛丑、壬寅、癸卯、甲辰、乙巳、丙午、丁未、戊申、己酉、庚戌、辛亥、壬子、癸丑、甲寅、乙卯、丙辰、丁巳、戊午、己未、庚申、辛酉、壬戌、癸亥となっていくわけだから、この組み合わせは 60 通りできる。甲子(きのえね)から再び甲子に戻ってくると 60 年かかるから、60 歳の人、暦が一巡して元に戻るという意味で「還暦を迎える」といわれる。生まれた干支に帰るから、還暦を迎えた人は新しい人生の出発点に立つという意味もある。そこで、赤ん坊に戻るという意味で、赤い頭巾と赤いちゃんちゃんこを着る風習がある。だから、還暦をすぎた人は、もう赤ん坊に還ったわけだ。赤ん坊は国の宝である。みんなで大切にしなければいけない。したがって、還暦をすぎた人も国の宝であり、みんなで大切にすることは当然である。多少の戯言も大目に見てやろうではないか。ちなみに、雲竹齋もすでに還暦をすぎた。

謎の陰陽師(安倍晴明)

陰陽道については、第 16 回「6 月は時の記念日」のところで紹介したが、陰陽と五行(五気)に十干・十二支を方位、時間、季節などに配して陰陽道は発展した。古代日本の朝廷にあって、天皇の衣服や書物などを管理する、いわば秘書官室ともいべき中務省(なかつかさしょう)に所属する陰陽寮には、天文道に関わる天文博士、暦道に関わる暦博士、時刻に関わる漏刻博士などのほかに、陰陽師という陰陽五行の思想を用いて、天皇政治に関するあらゆることに関して吉凶、災害予想などをする役人がいた。たとえば、奈良から平安に至る遷都の際には、土地を選び吉凶を判断することや、占星術をもって作物の豊作不作を占い、豊作祈願祭などを判断することなど、また星だけではなく、月、雲、風などの大気を常に観察して、変化する意味を占い報告するのが役目だった。今でいう天文学、生物学、物理学あるいは医学などを修めた学者で、かつ風水師であり占い師でもあったわけである。これらの仕事は国家の最高機密だったが、陰陽寮の長官は陰陽頭で位階が従五位下、陰陽師などは従七位だった。五位までが宮中に昇殿が許された殿上人(てんじょうびと)だから、身分は低かった。

12 世紀の初めに成立した『今昔物語集』によると、安倍晴明(あべのせいめい、921～1005)という陰陽師は、非常に優れた人物で、数々の伝説を残している。安倍晴明は、修行して術を会得しなければ見えない鬼神を、小さいころから修行なしで見えるようになっていたという。それまでの陰陽道は、吉備真備が開祖である賀茂家が独占していたが、この安倍晴明が出て、天文道は安倍家が、暦道は賀茂家に二分することになった。安倍家は安倍晴明の息子安倍吉平が陰陽博士から陰陽助(すけ)となり、位階も従四位上になって大出世した。安倍家は、その後土御門家の祖となって、江戸時代には土御門神道を成立させて、日本の神道に大きな影響を与えている。

安倍晴明は、その生い立ちが謎に包まれている。一説には母が白狐だったともいわれたなどと、当時でさえ、かなりの部分が謎だった。だからこそ神秘的で人々が魅せられたのだろう。そこで教訓。たとえ夫婦、恋人といえども自分の過去の人生すべてをバラしてはいけない。「あなたのすべてが知りたいの」などと甘い言葉に惑わされてはいけない。若干の秘密をもつことが二人の関係を長持ちする大切な要件である。金の切れ目が縁の切れ目であるように、すべてを知ったときに破局のときなのだ。

暦による占い(六曜九星)

大安とか仏滅とかが書いてある暦がある。これは、旧暦時代に使われていた名残なので、中国から室町時代に入ったものである。これを「六曜」というが、一種の占いという迷信的なものである。先勝(せんしょう、せんかち)、友引(ともびき)、先負(せんふ、せんまけ)、仏滅(ぶつめつ)、大安(たいあん)、赤口(しゃっこう、しゃくく)の順に付けて使われるが、晦日(みそか、最後日)の 30 日が先勝であっても、翌日の朔日(さくじつ、最初の日)が友引とは限らない。1 月を先勝から、2 月は友引から、というように定めて、機械的に付けていくからである。

また、「九星」というものがある。一白水星、二黒土星、三碧木星、四緑木星、五黄土星、六白金星、七赤金星、八白土星、九紫火星のことだが、その年の星を中央にして回りに八つの星を配した九星図と、十干十二支を組み合わせた 60 とおりとで、180 年周期の干支九星ができる。生まれた年の星とその年の星から吉凶を占うことが出来る。科学の発達した現代でも占いは勢いが衰えることがない。カリスマ占い師だなどといってテレビに出てきて、いいたい放題のことをいう人も増えてきた。占いに関する本も書店に数多く並んでいる。だが、それらは万物の森羅万象に関するものではない。大概は人間の欲望が絡んだものであり、人生相談の様なものだが、「占いは遊び半分に行ってはいけない。また、占いをお金儲けに使うようになれば、世界の終末が訪れる」と、新宿の占い師が、高い見料を取ってそう宣った。